



0 1 2 3 4 5
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5
JAPAN
TAMURA

門 3 呂 6
號 460
卷 1216

蝦夷風俗彙纂後編卷六目次

○工業

船製作の事

弓箭製作の事

百工

鍛治及鞞の事

樺皮みて笠等を製る事

煙管を製る等の事

靴を製する等の事

○器械

兵器の事
古器の事
金字兜の事
エモンの事
蝦夷象眼の事
シユトの事
食器の事
土鍋の事
酒瓶の事
酒器の事

蝦夷笛の事

蝦夷琴の事

蝦夷器物の事

唐太器械の事

小兒を入れ置器械の事

麻苧を仕懸弓の繩よ用る等の事

海馬皮を繩の代よ用る事

器具よ關る草木の事

蝦夷風俗彙纂後編卷六目次終

蝦夷風俗彙纂後編卷六

いへども。身よ恙あくかれ。猛獸害ふ所をざる事等を祈るなり。其祈る詞ふ。キムン。カモイ。ヒリカノ。イカニ。コレと唱ふ。キムンを山をいひ。カモイは神をいひ。ヒリカモ。善といひ。ノ々助語なり。イカシモ守護といひ。コレモ賜きといひ。山神よく守護賜きといひ。ふ言なり。かく比如く山神を祭り終りて。夫より山中より入り。木を尋る時のみ。有限らば。もべて深山に入る。とまき。右のまつりをなす事。夷人の習俗なり。夷人の境極北邊陲也。地として舟等をつくるとき。多くも沢寒風雪の中より在て。其艱險辛苦のをあはざ

しきなり。さて山より入舟敷とあそべき良材哉尋ね求め。尋得る所及で。その木也下ふ至り。まゝイナヲをさげて地神哉祭り。そば地の神よりこひうくるあり。其祭る詞ふ。シリ。コル。カモイ。タン。チクニ。コレと唱ふ。シリモ地をいひ。コルモ主ミツルをいひ。カモイモ神をいひ。タンモ此といひ。コレモ賜きといふ言ふて。地を主る神此木を賜きといふ言なり。おの祭り終りて後其木を伐らるなり。敷せ木のみ。有限らば。もべて木残伐んとまれば。大小とも。其所の地神を祭り。神おひ受て後伐りとる事あり。是又夷人

の習俗あり。木を伐倒しそのまゝ株のかこちらにきて。先敷を作るあり。されど舟は善惡ミヤク。たゞ此敷ふよる事小て。そのつくりやうとに容易あらば。おふてまづそのかたちの大概を作るなり。船敷の大概を作り終りてより。其伐取し木は株ならびふ梢ふ。イナヲをさしげて木の精を祭る。其祭る詞ふ。チクニ。ヒリカノ。ヌウハニ。チップ。カモイ。キ。ヤツカイ。ウエンアンベ。イシヤムヒリカノ。イカシ。コンと唱ふ。チクニ。そ木といひ。ヒリカヨクも善といふ言。ヌウハニを聞といふ言。チップを船をいひ。カモイを神といひ。キも爲せ

をいひ。ヤツカイもよりてといふ言。ウエンアンベも悪き事をいひ。イシヤムもなきといひ。ヒリカも上よ同じ。イカシも守護をいひ。コレも賜ヨクといふ言みて。木よく聞け舟の神となひふよつて。惡事あくよく守護さまられといふ言なり。あれも夷人の心ふおよそ精何る物ふハ。おとぐく魂魄ありとかやえざるふようて。無情の木あれども。かくイナヲをさしげて祭りとなし。其伐とりしあとエマとのべて尊敬するなり。魂魄と夷語ふラマチと稱す。草木だみかくのオトコくねきば。まして有情比禽獸あご殺スルときも。其精とま

つる事甚ざ。厚し。木は精を祭る事終りて。その大概作
立たる船敷と。山中より出し住居のうそらに移し
置て。夫よりつくり立てるの工夫ふかくるなり。まづ舟
敷の兩縁のうちに横木といき。内へあがまざるやう
にあし。まゝ舳艤ふ筵やうのあせをぬつくまき。ひ
の入損ぜざるやうにして。幾日といふ事あく日ふさ
らし置なり。其木のよく乾きかこまりて。ゆぐみく
るひ等せ出ざるとあち。夫より地ふ角木ならべ敷。其
上ふ敷をもゑ。うちふ大小せ石を入。もぞりの穩りな
るやうふあし。さて水を十分ふあるあり。此水せおも

むきみて。舳艤兩縁より初め。すべて形の善惡をかん
う。その外水上往來の遲速。波濤を渡るの便利。ゐる
ひも出岸着岸。又そ陸よぬげおろしの事等まで。巨細
よ舟せ様子を熟慮して。その高低曲直や漸々削りな
いがあり。せべて夷人の境。いまざ規矩といふものも
あらば。かゝる工夫せみふてつくり出せるゆゑ。さく
ろと勞し思ひ凝し。數月とかさぬるふあらばして。ハ
敷ひとけ作り得る事もならざるなり。そのうち月日
をかさね。纔ふ作りたる敷ふも。かれじきせ便利ぬし
れば。徒ふもつるもありて。其辛苦と極る事。言葉ふ

盡しがくし。

船の又よしを。夷語みラフシヨフイタと稱す。ラフヒ
モ羽残いひ。シヨフヒも付る事残いひ。イタモ板とい
ひ。羽をつける板といふことみて。又よしハ左右モ羽
板をつける所あるゆゑ。かくいへるなり。夷地の
内所の風俗。又寄て。其形もまゝ少しくかそるなり。船
の艤とトタテといふ。あれまゝ所よりて形も替り。
名も同じからざるなり。羽板モ夷語みチプラブイタ
と稱す。チブモ舟といひ。ラブモ羽といひ。イタモ則板
の事みて。舟の羽板といふ言なり。舳。又出る板モナム

シヤム板と稱す。ナムとも舳と云。シヤムモ出るとい
ふ言なり。艤モ出る板モウムシヤム板と稱す。ウムヒ
モ艤といひ。シヤムモ前と同じ言なり。
目塞ぎ。ヒンラリツブと稱す。ヒンモ物の間隙。ヒル
といひ。ラリもふさぐをいひ。ブモ器物といふ。間隙と
ふさぐ器といふ言あり。夷人の舟モ釘モ用ひず。又あ
繩モ縫合する故。板と板との間にひざ。まきもある事
なり。依て苔を下。又おき其上へ木を立て。繩モ縫合
する。苔を草とたがひ物のまきまなど。又のつる
ふきやそらう。本邦の工家モ用る。卷檜皮^{マキヒダシ}ヒ。同じ

さま小用ひらる。故なり。苔を夷語ふムンヒ稱す。ム
シモモト草せ事なる。夷人苔をも草とたあじ物と
覺えくるよりて。かくもいふなり。其縫合する繩も。
夷語ふテシカヒ稱す。

ハラ木。夷語ふキウリヒ稱す。此語解しがくし。尻
岸内より廣尾まで舟ふる。多くこせ具を用ひ。廣
尾より國後までの舟をもとぐく此具を用ふ。是も北
海による程。風波ハラキグレタ。舟は堅固ならん事
哉もうりてなり。尻岸内より廣尾までハ。さのス北海
ヨハラビして。風波せ志のだり。もやまきゆゑまき

ヨハサセ具を用る舟をハキビ。多くハ用ひ。・
前ヨイヘルテシカ。船を造るふ板を縫合する。繩
をのみ稱る。ヨカギラビ。木をとぢ合する事をヨイヒ。
又建などをハム事をヨイヒ。カモ糸せ事ふて。物とと
ち合せる糸といふ言あり。テシカふ三種なり。一種ハ
ニベシといふ木せ皮をとぎ繩とあして用ふ。一種ハ
櫻の皮をとぎて其まゝ用ふ。一種ハ鯨のひげをへぎ
て其まゝ用ふ。の三種のうち鯨のひげ哉バ。多く廣
尾より國後迄。舟ふ用ふ。尻岸内より廣尾までの地
も。鯨哉とする事まれなる故。用る所のテシカ多くハ

櫻とニベシとヒ皮をもちふ。

船ヒ製作全く整ひてせち。イナヲヒ舳立て。舟神を
まつるなり。舟神モ今本邦船師の語。船靈ブチダマといふ。グ
バヒシ。其祈る詞。チブカシケタ。ウエンアンベ。イシ
ヤム。ヒリカノ。イカシコレヒ唱ふ。チブモ舟代ハヒ。カ
シケタモ上ヨトイフ言。ウエンモ所しき事をいひ。ア
ンベモ所る事をいひ。イシヤムモなき事をいひ。ヒリ
カモよきをいひ。イカシモ守護を云。コレモ賜きヒ
ム言ふて。舟の上所しき事所る事なく。よく守護を賜
へヒイふ言なり。六の舟神モ祈る事モたゞ舟上ヒ安

穏を願ふせみふらうば。らうたにつくさる船ふ。神靈
とまねき移生といふあうろもらうて。あとく意味
ある事なり。

是よりてまづ舟ヒ製作を全く備るなり。おきより後
ふいふ器具も皆舟中用る所せものにして。此品
々ぞのひてより海上と走る事も渡る事もなる
なモ。

本邦みて船ヒ漕ためふ。櫓ともめ入づき船縁もある。
木製の乳の如きものと。タカマチと稱れ。タカマチ跨
ぐ事といひ。呼ももづて小さき物ヒ高く出たるひと

乳の如くなるといふ。此タカマチと稱する言其義い
まざ詳ふらば。夷人のいふとおろも。舟をあぐふらむ
ら木せらる舟も。夫ふ左右の足をふみにて。左右せタ
カマチふ。カンチをさしこス。跨り居てあぐ。らばら木
せあきる。舟底ふ横木を入夫に足を踏かけ跨うるて
こぐ。何きまごかる所の左右のふちに。乳のほとく高
く出てたる物故。まさがる乳といふ心みて。タカマチ
と唱ふるよしなう。されども此義さだうある解とい
思それば。

櫂の事とカンチと稱し。左右のタカマチふさしあス

て舟をこぐ。奥羽の兩國ならびふ松前等せ漁舟ふ。此
具を用ふるをらりて車櫂といふ。おきもそせ形櫂ふ
似て。左右の手にてまもしく水をおぐ事。車せめぐる
べ如くなるゆゑふ。かくはいへるなり。

本邦の船小用ふる櫂とああじ事ふつりふ物と。アシ
ナブと稱せ。アシナヒも。水とりきて舟を止むる事
といひ。つる器といひて。水とりき船を止むる器と
云ふ事なり。奥羽の兩國ならびふ松前等の漁舟ふ。此
具を用ゐるをらりてねりがいと稱せ。但し是もかぢふ
用れぞりりふ限らば。時ふよモてかいの代うともな

其故の名なるべし。

帆の事と。夷語ふカヤと稱ひ。夷地ふ生るキナといふ草みて作り。筵のおときもせなり。帆をカヤと稱する事。其義いまご詳あらば。

もうどりの事と。夷語ふワツカケブと稱ひ。ワツカも水といひ。ケもどる事といひ。フも器といふ。水を取器といふ事なり。奥羽の海邊ならびふ松前等みて。右廿形したるカかとうと。ヘケと稱ひ。是を夷語ふ解するよへる水といひ。ケもどる事みて。水とりといふ言ふ。水を夷語ふへともいひ。ワツカともいふ。今夷人カイタの語解ゲこし。

船を漕とき腰掛る板を夷語云シヨイタと云。シヨも座むる事といひ。イタも板也事みて。座むる板といふ言なり。是を舟敷也上よ横よ入。船とあぐ時。是と左右北向むら木よふみうけ。腰と此板よかけてあぐあう。右七種也具も。舟の大小よありて。製作もまた大小なり。此具備りてよう初て舟よ乗る事なり。

上ふいへる七種の具もとくく備りて。海上走らんとゆれば。水伯よ祈り。海上安穏ならん事を願ふ。其祈る詞よ。アトイ。カモイ。子ト。ヒリカノイカシコレと唱ふ。アトイを海といひ。カモイも神といひ。子トも風波

也穏うなるといひ。ヒリカノイカシコレも。前よ云るぶとく。海の神風波のおだやりあるやうよよく守護だまへといふ言なり。右也祈り終りて。夫より出帆するなり。きべて夷人の舟を乘ふも。おとく法有ることふて。本邦の船師ふことある事ハカラビ。先舟を出さんともるよも。其日也天氣風波の善惡を考ふる術もあり。船中よて忌み憚るの詞もあり。或も風波よぬふときも。海神よ祈るの法もあり。其外海上を走るといへども。凡一日よ着岸なるやからざるやの程を計て。格別よ遠く岸と離きて乗る事ハカラビ。常よ海岸

ふ添て走るなり。是ハ北方ニ海上風波のへらき事甚しきゆゑ。船或海上ふ泊まる事も。夷人六と云ふ。それきらふげ故なり。此外舟中よての事も。夷人もべて秘密に事となして。かるく敷も入ふ語らざるゆゑ。詳りならぬ事共多し。

前ふ出せる舟敷は事と。夷語ヨイタシヤキチフと稱也。イタモ板といひ。シヤキモなきといひ。チフモ舟の事みて。板あき舟といふ言なり。とと舟比敷あるとかくいふあせも。丸木とくうたるまゝよて左右比板をつけ。夷人河を乗ると大ろの舟と六とならば。時よ

よれば其儘ふて川と乘事も有ゆゑ。ふかくもいへる。萬葉集ふ棚ねし小舟といへるハあれなるべし。今ふ至りて船工の語。敷より上ふつける板を棚板といふ。されば棚板あき舟といふ心あるべし。今本邦ハ船の製作に。かゝる敷の法と用ひざるハ。いつの頃よりふかく有ん。カシキオモキなどいふ事。サ。船工と。おれ製作ふ初りしよア。

カシキといへる。オモキといへる。少しつゝ。その製ふかくそつたる事ハ。阿達じ。格別ふたづふ所も非ず。何處も敷を厚き板ふて作り。それふ左右

板を釘みて固くとぢつけて。本文ふいへるイタシ
ヤキチブシ如くふあし。夫より上ふ左右せ板を次
第ふ付仕立るあり。此製至て堅固なり。今之船工せ
用る法皆是なり。

其製の堅固なると利として。専らそれのみを用ひし
より。終ふ其法をハ失ひし成べし。今奥羽の兩國并ふ
松前等ふてハ。な石其法を傳へて。漁舟ふハカヒとゞぐく。
敷ふ右のイタシヤキチブを用ふ。是をムタマと稱す。
ムタマもムタナ比轉語して。どりもな石さじ棚板あ
き舟といふ。さうなり。其敷ふ左右の板をつけ。夷人

此舟とひとしく仕立たるをモチフと稱す。モチフを
モウイヨツブの略として舟せ事なり。もづて夷地ふ
してハ。舟せ事或チブといふ事。よせつねふきども。其
實もモウイヨツブといへる。船の實稱ふして。チブ
といへる。略していふは詞なるよし。老人セ夷もい
ひ傳ふる事なり。モウとも乗る事といひ。イヨモ入ま
る事といひ。舟器といふ。乘たり入たりゆる器とい
ふ言ふて。舟の事をいふなり。此語の轉し移りてモチ
フとも稱する成べし。凡此等の事且ハ前ふ出せる舟
中此具のぞとき。さあがら夷地ふ用ふるまゝなる事。

奥羽の兩國。及び松前より存し残りたる事多くなら
ば。

俗より丸木舟を製作する事。イタシヤキチフと内
にある事なし。形の少しくたゞひて。緩き川ならびに
沼等を乗る船と。急流せ川を乗船と二種なり。其急流
の川を乗船。川の格別の高低なりて。水せ落る事飛
泉せおとくなるところを。さのぼる事等有とき。水
の入らざるがため。舟の舳より板をとぢ付るなり。
蝦夷此地松前氏の領せし間も。其場所々々オトナ
と稱するもの。其身一代のうち一度づ。松前氏より目

見ふ出るおとぢりて。貢物を獻せし事なり。其貢物積
ところせ舟と。ウイマムチフと稱し。其製作のさま
よせつねの舟ふ替りたるなり。ウイマムち官長せ人
ふ初めてまみゆる事といふ。チフも舟せ事みて。官長の
人ふ初めてまみゆる舟といふ言成べし。

老夷のいひ傳へよ。古より松前氏へ貢するおとく。シ
ヤモロモシリへも。右せ舟みて貢物を獻したる事
なりといつり。シヤモモシヤハクルせ略なり。シヤ
ハモ。かしらたちする事をいふ。クルも人といふ事
みて。おしらたちする人といふ。口も語助あり。モシ

リモ島といふ。此儀もとふ意味ある事なり。夷語
水せ流るゝ事とモムといふ。地の事とシリといふ。
モシリモムシリは略として。流るゝ地といふ事
なり。其故も凡嶋は水上よりのひたると。遠よりは
ぞめば。流きべき地のさましたるゆゑ。嶋の事
とモシリと稱するなり。さよきバシヤモロモシリ
とも。かしら立たる人せ嶋といふ事みて。本邦をさ
していへるあり。古めとき蝦夷といへども。おとく
本邦ふ屬せし事故。本邦をさして頭の人せ嶋と
稱せしあり。其貢物を獻ぜしといへる事と。夷人の

云傳へたるも。いづみをさざぐ成事よや。日本紀の
中ふ此事と載たる所數々みえり。

ウイマムチフと粧ふ具三種あり。そのうちナムシヤ
ムイタと。ウムシヤムイタとの二種も。前よいつると
おとならば。今一種トムシの義。いまご詳ならば。ウイ
マムチフふ用る此粧ひの三種も。破き損ひといへビ
也。おとく尊敬してゆるうせふせば。もし破れ損ひる
事あきば。家せ側のヌシヤサンふ收め置て。みだりよ
とりをつる事あらば。かくのぶとくせざれば。かな
うむ神の罰を蒙るとして。おとふおそき尊ふ事あり。蝦

四

割木爲底。兩舷舳艤合縫皆繩結。不使鐵釘。舳艤注流蘇。乃割木之所製。兩舷置櫓。各數適。舷長短加減之一人盪。兩櫓船却行甚駛。故棹手皆向船尾坐。尾又置一大櫓。以爲柁用。帆檣兩條掛席其間。卷舒不似我邦帆檣之自在。別置小舶一隻。運載物於本船。一同我邦三板之用。風蝦夷。

蝦夷人の舟ハ。釣と少しあつりふ事なく。藤比蔓有る
ひハ繩よてからみ。板也をぎ目あるひハ少しの穴あ
ども。昔有るひハ木也皮の類よて。つくろひ掠る事な

す。荒磯の場所へ行つ。舟つあらざき港もあき時より
舟を陸へ引上げ置く。舟も薄くして釘を用ひ
ざきい。軽くして取りつらみ心やすし。又海上ふも
甚ざ浮やせて乘よし。久しく圍ふ時よハ繩を切ほ
どきて。船板を重ね。雨覆ひして置く事あり。乗べき時
節ふも。又繩のるひい藤蔓よてからみて乗るおとな
す。北海隨筆

石狩の舟を所謂蝦夷船同製みて圓木艇なり。船材ハ
タモと云木あり。但蝦夷舟圓木艇といへども。兩舷各
一枚の板を添て舟底を深くする者なし。今日所

乘せ者ハ一個廿圓木の儘みて船底甚淺し。然ニ舟身も稍長し。大略横幅三尺弱にして。長さ殆ど七間もあるべきあり。尤大小一様あらば。觀國錄

唐太島ふ用ふる船也。夷人みづうら造るものなり。良材ねき島あれバ。柳の類也。ひも夷稱ヤエニといふものとて。こきを造るなり。其板をあひどう出でく軟弱にして。危きこと蝦夷船ふあえり。其製造の事。船具のとときハ。蝦夷船ふ異なる事なし。北蝦夷圖說附唐太の船也。柳の丸木を彫て。その内ふ梁をい達ひらうして用ふ。蝦夷松の根をほりて。釘ふかへ用

ふる事なれば。其船至て弱しといへり。休明光記附錄
○弓箭製作の事
弓箭製作の事也。同編卷五伎藝の部弓術の所ふ併せて云り見るべし。

○百工

無陶鑄漆髹匠。獨長於彫鏤。自刀削刀柄揭須匕。皆彫鏤成文。文多作波紋魚鱗。亦好鏤巴文。工各有一種造意之章。不許它人作之。其鏤刻初不設範。隨刀成文。匀成自得其宜。地便漁獵者無良工。遠海閑暇無事者多善之。見今安子打地方。有最好手可玩。魚叉矢鏃皆磨所得又製之。

非別鑄成者。性亦長磨刀。雖至鈍之刀。一經蝦夷手。則水可以斬鮫。陸可以斬熊。蝦夷風土記

○鍛冶及鞴の事

唐太夷人ハ鍛冶を善キメテ。古き鉄類舟釘等を集めて。刃物ハつなり。もと山丹より習ひ得シテ。云。鍛冶藥を昆布と土。その外都合五味合て鍛ふ。地鉄ミも鋼ヒなる。鞴ハ皮シテ作ス。一人して鼓ハるなり。小刀類ハ左刃ナリ。邊要分界圖考西本邦書。唐太嶋夷。鍛冶をなハ事。蝦夷嶋近代なきところなり。按ハ往古本邦の諸鍛物。蝦夷嶋ハあまねりらざる

其業態他邦より傳ヘ來るもハふくらハ。蓋島夷比考北邊の老夷。其業を熟知する者あり。近代より至つて本邦の諸物。漸々嶋中より偏くなりしより。其業廢せしもハならん。

當時ハ。鍛冶して其用器を製せしめるべし。北地宗谷邊の老夷。其業を熟知する者あり。近代より至つて本邦の諸物。漸々嶋中より偏くなりしより。其業廢せしもハならん。

其業態他邦より傳ヘ來るもハふくらハ。蓋島夷比考北邊の老夷。其業を熟知する者あり。近代より至つて本邦の諸物。漸々嶋中より偏くなりしより。其業廢せしもハならん。

也。其鍛練の法。本邦鍛治也。あきところふ異なる事なく。そば鉄鋼ふして打延びてく。また鍤を繼などある時ハ。其鍤ふ灰泥の類をふみて火中ふ入火鍤とある。凡刀斧の類製し終て後焼刃を付る事も本邦のだとく。水中ふ浸して是とあり。然きども鍛練の具備らざれば。精巧の器を作る所ハ。其製するところハ悉く麿^{ムラカミ}として可悦物あり。北蝦夷圖說

○ 樺皮みて笠等を製る事。其業熟^{シテ}。北蝦夷人甚ざ不器用らしき者ふきども無造作ある器械等を作る。案外巧者なり。今朝キムンナイ出立の

時ふ見^シ。昨日同所逗留中。夷人樺皮を以て笠を作り。又ハ巨大柵杓等を作る。僅一挺の小刀を以て。異様の物と細工する事。殆ど内地人の及ぶ所ふ非也。觀國錄 蝦夷人ふも。雨降ても笠をハ用ひざる。風俗うと思ひしり。笠も有るやと云ふ。答へ^{タリ}は。いふ我等とて雨ふ濡^ル。雪ふからりてハ快モ^{アラ}されば。昔より蓑も笠も有るあり。さきど其を^ク作る暇あきゆゑふ。雨雪からりて歩行事なり。我々山住あきバ暇有故ふ。作りて用ふとて。又榆皮もて編たる蓑を見せ^スる。頗る面白い物なり。父^{シテ}日誌

○煙管を製る等の事

此蝦夷國のさいくみて。きせるを作ること。尤細工ふ器用あり。日本國のちらゝぎといふ木ふて。彼國ふも是どオシコといふ。中ふうつろなりて外堅しかるが故ふ其枝ときりて。そのきせるの形となむ。是残ヒレニボウといへるなり。さてまゝ日本人。此國ふ來りて。例の烟草持くるを見きば。能きたむあるゆゑ。少しむらひ得て。みふ打寄て是を味ふ事。又車せばとくふ座して。一人のせセレンボウを出して。其煙草をしきてひと口煙を吸。々なぐら傍あるわけへまゝい事。酒飲

時せよとし。幾度もかくさるあとなるよ。みふ無言ふ。先一人吸て傍なるむけへ廻り時より。我方へまハモ來るまでを。其煙うど口中ふ含みて。廻り來る時までふ。やうやく吐出を事あるゆゑ。いつてあづくなれる事どもある。此煙草入といふものも。木ふてつくる。其形大判廿形みて。高さ二三十寸餘ふも製せ。扱脇へ糸を付。つねよ腰ふ提て徃來見る事。日本國ふかそる事あしきせるよ應じて製し。穴つきせるを通して。糸よて志め付け。腰ふさを事なり。是等ふつくる木を種々の木を用るゆゑ。定りくる事なし。其彫物又面白く。何

のうちちといふ事もあく彫刻までして奇麗ある細工なり。さて此國の人小刀一挺みて多種の細工をあらわす。一つの奇事なり。蝦夷見聞誌

○靴と製する等の事

唐太夷人ハ皮革をあめい事と知る。是又山丹人あり。習ひ得し所あり。其靴と製する。靴ハ滑し皮と用ひ糸にて縫ひ脚半丸作り。海豹皮にて作る。あれをキテといふ。松前方言ふ鳴足袋といふ。邊要分界圖考

○器械

○兵器の事

弓以圓木爲幹長三尺。被藤蔓爲弦。矢制二羽多用鷦鷯鹿角爲鏃。削竹冒之。傳毒其間。別有鐵鏃。不以爲漁獵之用。皆磨小削而製之。凡射物近而後發。故射命中鎗亦傳毒。雖鈍一鋌立死。盜鎧連屬首冒之。遂被全身。皆以木造。一種短刀由滿州來者。名曰越木說。裝飾極麗。不必用真刃。猶本邦贊刀也。蝦甚珍重不敢腰佩。必掛之頸。其直至貴。典身三年。僅得買一具。至佳者雖典終身不能得之。寺子首有藏一古刀者。相傳其刀能喫飯。名曰安麻々。越別打母年復後。用屠海鮆。從此之後。不復喫飯。遂失其靈。說谷子有古盃一具。既無頸項。獨存號牌鐫八幡二字。此皆

蝦夷重寶。昭々著于東西部者云。刀裝之奇巧有呼。蝦夷後藤蓋方足利氏貳。工人後藤助右衛門等避兵入蝦夷。居多革地焉。采金銀多制刀裝。後亂定。稻載所制刀裝諸物去。船將開洋。蝦夷乘夜盡殺其人。剽掠其物。其物遂分散東西部。蝦皆知寶之。蝦夷風土記。

兵器を弓矢及刀を用ふ。其形殆と日本刀よ似て。其鐔ふも銀片を纏ふ。あれと帶をるも。紐と以て腰ふ結ぶ。矢筒亦紐を以て頸より右脇ふ懸く。其弓もエスセンホウト。

按小秦皮なり。未だ夷地有無ときかば。但弓材とな

キアキバ。オシコといふ木ふ當る。又夷人杜仲を用ふとも聞う。其長さ凡五尺餘。矢は長さ尺餘芦を以て造る。其長さ凡五尺餘。矢は長さ尺餘芦を以て造り。

按小芦といふをせる。クマザ、サ竹なる。其尖ふ黒色の毒膏を塗る。若し此矢ふ中るをせる。其毒は爲ふ死也。彼等何きの地ふゆくといへども。弓矢と一刀を携つざる事なし。恒ふ此等せものと帶山林ふ入て。熊鹿エランツ。

按小鹿の類。唐太夷名ツナカイ。魯西亞ふてオレン

と云なり。漢土より馴鹿と名く。又清一統志より我倫と譯するもの。オレンシにて。此エランツの事なり。

及その他。我方よりなき所より猛獸。及鳥類を射るなり。邊要分界圖考

武器も弓矢劔鉾等類と用ふ。其劔の長さハ。都て皆大約日本の短刀等し。兜も片板を以て綿布を狹み製したるものなり。おきを着くる形も甚異狀にして。一笑ふ堪づざるべ如し。亦一種の毒矢を用ふ。安し此矢ふ中る者也。其疵瘡あるとなし。性質常より戦争找嗜む。然きども同類相争て殺生を事ねし。野作雜記譯說

土人等は鎧と云物有。革を漆みて塗りし小板を皮にて纏くる物なり。其形桶の底あきぐ如く。後より袖を結付る物と見えたり。按るふ是打掛鎧の類也。然るふ破損して如何ともぬし難し。六七十年前也。當山中より餘石ど有しげ。今も五六領あらでハねしと。昔も金銀を鏤しむ有しとぞ。或人語るふ。それより吾皇國古代の打掛甲冑遺製あり。今勝みて引合せ脇盾といふを用るふ。武内宿禰が始めしと。明珍家みて云傳ふる由なるも。古き傳一あるふや。又明珍家といふも。紀の辛梶の臣ふして。世々鎧作るをもて仕奉りしと。辛梶も韓カナガ

銀冶あらんを。後書改めしあらん。勝ふて引合ひる製。
韓製ふて習效ナラヒしふや。姓氏錄ふ。紀辛梶も。坂本臣と同
祖なりといへば。則武内宿禰の始めしといふも。據な
きふもあらざるわあ。又鎧を甲ふ當るも。打掛て甲の
おどきといふより起りし物のといへり。頗るおもし
ろき説なり。されば此打掛鎧を。おそらく用ひし物の。延
喜式兵庫寮ふ。掛甲一領百枚もと有。また其傍ふ冑と云
物あり。是も革の小札を緘して。頭比尖りし笠の如く
ふ作り。鞚ヨロも革の小札を緘くる物なり。また一種楋楠
樹の木もて。小札を甲冑共ふ作りし物もあり。玩弄物

の様ふたむひしき。左ねくりしや。本朝軍器考ふ。三代
實錄ふ。元慶の初出羽の國ふて。蝦夷せためふ奪われ
し。戎具せ事あるさましふ。甲冑の外まよ鐵駄革駄あ
ど云物見えたり。それが中。本駄も今も蝦夷ふる。其遺
製あるならと記せしりば。是を古るき物と思する。天鹽

日誌

蝦夷國ふ奇ある兵器あり。夷語シヨチキネと稱し。則
稍のかきものあれども。何國より渡り来る故であら
ば。通詞の言語ふも。戰せとき足せ甲を突といへども。
あらるやいなやとあらば。長さ五尺五寸より六尺も

うりよして。頸大よ丸し。其先よ刃あり。鍔あるゆゑ甚重し。其柄も木みて作りたるものもあり。その用ひ方つまびらかならば。まゝスヅチといふ器あり。長さ三尺四五寸を限りとし。頭も杵せどくふとくして。所々アツシサ糸みて巻たるものあり。是を戰ひふ用ふといへども。又定かあらば。其形よく日本國の鉄杖ふ似されば。うけ辨慶の鍔杖ふ似せて。作り初めしものあらんといふ説あれども。然あるや否をあらば。まゝハヨクべといふ器あり。鎧のうちあるものねり。熊の皮みて製したるをせみて。其れどしの糸も。みか藤

のつら類なり。そのかゝち袖あき合羽ともいふづし。其袖のかくる所より口にく事なり。胸の中みてあめ合まるものあり。その乳せ上ふ鉄もせみて紐を付る所らほども。何の用ともあれず。其襟ふ日本國の鎧せ袖の鍔具なり。其丈三尺四五寸ばかりて。甚く剛きものなり。横巾ひろげて時を六尺餘なり。此器呼奥蝦夷國にてて。タカラカウシともいふねり。まゝコンナといふ器あり。兜の如きものあり。是も何獸の皮みて製るも思ひくなり。其形四角なる紙せ中程を以て。引あおきたる物はおとくして。其項ふ木みてつくりたるも

セを付くる物なり。紐もかのアツシの糸あり。又シツ
トケウ井と稱するハ。則小手といふ事なり。いさやの
木みて製りたる棒也。筋がねのだとくして。アツシふ
とぢ付たるものね。スウチカムと稱するハ。則膳當
の事あり。製しやうみな同じ。以上兵具といふものな
きども。其實否甚ざ不審。蝦夷見聞誌

○古器の事

凡有罪者。出損珍寶以償其罪爲約者。出之以代質所謂
珍寶。大抵以本邦古兵具爲寶。甲冑刀劍及鍔。其他刀裝
以金銀裝飾觀美奪人目者重之。如償罪各隨其輕重增
處者亦有之。蝦夷風土記

蝦夷志曰。金玉以不爲寶。寶とする物ハ。古の器物刀劍
の類にて。盟約結信。皆其寶を用て贖罪。又如斯。亦曰其
寶。此中より最尊重する物也。狀燕尾ふ似て。兩岐ふ鈴を
掛く各一口。是を地室ふ藏。祈禱する時を祭る。是をク
ハサキといふ。此義なきふらぬど。總てクハサキと
云ふものふ不限。日本の武器を甚尊重し。神を祭ふ專
ら供る而已。クハサキを見るふ其製不同。按るふ昔此

商人兜^{サマ}鍬形残。士の頭^{サマ}も戴貴寶ありと教。賣て商料を取。名^{サマ}鍬先^{サマ}と云ひ傳へたるもの。蝦夷^{サマ}語るを聞く。古代より夷地^{サマ}傳する正真^{サマ}サクハサキ也。シコツ^{サマ}といふ所の酋長の家^{サマ}有。黃金あり。其餘^{サマ}皆後代^{サマ}至て求る物なりと。是全く蝦夷^{サマ}の好^{サマ}隨ひ商賈の輩^{サマ}造り渡りしあるべし。其器名不同。頗る鍬形小似て。新きも木^{サマ}みて作り。銀^{サマ}みて文^{サマ}を置る物多し。蝦夷^{サマ}拾遺

土人^{サマ}も總て寶物^{サマ}を山^{サマ}隠し。我子^{サマ}も教へ^{サマ}置。死期^{サマ}子に教ふるあらむしなるべ。若頓死^{サマ}するや是を教館邊^{サマ}も有し事^{サマ}にて錢^{サマ}を壺瓶等^{サマ}へ入埋置。其^{サマ}を子孫へも教へ^{サマ}して。空しくなせしあり。文化度^{サマ}も錢^{サマ}龜澤村^{サマ}ふて。古錢^{サマ}一瓶^{サマ}を堀りし云々。西蝦夷^{サマ}日誌

久摺^{サマ}小隣^{サマ}十勝^{サマ}穴居^{サマ}三十餘有。土人^{サマ}も小人の跡と云り。是小人ならば。古人^{サマ}が穴居^{サマ}な事。此地のみあらば。内地^{サマ}も所々^{サマ}見て見^{サマ}り。爰^{サマ}雷斧石^{サマ}土器^{サマ}の欠等^{サマ}出るよし。土器^{サマ}も全く^{サマ}至て稀なりと云。傳^{サマ}ふ往昔

鍊器ぬき時也。此地鍋も土みて作り用ひ。野菜魚獸等の肉を切るよ。此雷斧要用ひ。家財を作るふは。石錐石鑿等の物有。人と擊合叩合等する時も。霹靂磧又も石槌等云有。是則神武記の異志都々伊毛智とする物なり。鑲槌も今義解軍防寮も。拋石と見る物みて。是小繩を附。飛礮も擲げ物なりと思ふ。其邊是等を作りし砥石と云物も。三つ四つ捨有けるべ。其一つを船ふ載て持歸りぬ。土人の言ふ。我等之法として。何一人之間地より來らざるとて。事足らぬ事なきなり。未だ山中ふる。烟管も木まゝ石みて作り用ひしげ。追々濱近

く余等も住様も成り。器財も衣服も奢侈も成りて。今も我等木綿も着。真鎗の烟管を持様も成り。依てそれ丈土人の氣力衰へ。力も弱り質朴の氣も失行たりと。まゝ此地石鎌多く出るなり。何きも十勝石あり。日誌勝

○金字兜の事

西部オクワコサ郷の酋長。兜を一つ家寶とい。左龍頭なりと云々。他郷は富長夷惜ひ。貴價を以て交易を請といつども。敢てきりば。故ふ奪之。密うふ岩壁を穿て納隠すといつども。兜須臾みて歸り收ると云り。正八幡は金字あり。いづきの代。いづきせ人の甲といふ

事をあらげ。又一異なり。北藩風土記

○卫モンの事

卫モンとて。山刀せやうなるものを。夷人等を所持せ
り。常ハ帶せば。それある時を餽り置くなり。此刀を蝦
夷人の細工みてハなし。唐太渡りあり。銀找自由ふつ
つふやうにゆゑ。大方銀の餽りたり。中身のよろし
いらげ。九寸九分ばかりにて。鉛のびとく見ゆるね
う。是找寶物ありとして。さうふ用心向の爲みせざる
もせあるべし。北海隨筆

○蝦夷象眼の事

蝦夷象眼といふ物有しが。今もあし。元來蝦夷人の仕
出したるものかあらげ。後藤の一類。畿内の亂をさ
けて。江州より越前へ渡り。夫より落來りて。産業すあ
きゆゑふ。目貫縁頭を彫りて。夷人へ渡して。產物と交
易として。渡世されせしあるべし。其も北蝦夷ふらう
しを。商舟のものぞも求め出して。重寶ふせし故なり。
此後藤といふもの。クンヌイふ住たりしといふ。クン
ヌイふ今も金堀屋敷といふ所。又川上ふ沼ぬりて
金砂を流す。そむ沼の水底みて。時ふよりても鶴北聲
をたつといふ。甚いふのしき説あり。然きども唐土ふ

也。順天府の香河縣の百家灣といふ處あり。その水源を知る事あし。四時とも水つきばむうしあふ住居せし人百餘家有しづ。皆水ふきふきて淪没したり。今も猶風雨昏晦の時も水中ふ鷄の聲ありといつう。此蝦夷象眼といふ。深山の夷人ふも。今もまきふ所持するものありといへ。北海隨筆

○シユトセトセト事

是らウカルを行ふの時。拷掠コリョクする用る杖なり。シユトと稱する事も。もとの轉語あるべし。

本邦此語ふ。昔アラタニももと訓したゞ。

あれと製するみを。いづき比木ふても質の堅固ある木をもて製するなり。其形さく變りたるありて。名も又同じくらべ。ルライシユトと稱するハ。ルとも桶といひ。ライハ在るをいひて。桶の在るシユトといふ言ぬ。シユトの種類多しといへども常ふもあのルライシユトのみを用る事なし。夷人の俗。此具を殊の外ふ尊びて。男夷もいづきも一人ふ一本宛を貯藏する事なり。人ふようても一人ふて三四本を藏するもあり。女夷あどふも。聊ふても手をふるゝ事を許さば。かしらのとあろふも。ルケイナヲを卷て枕せよ

掛け置なり。又チセコルヌシャサン棚の上ふ納め置事も有り。旅行する事など有りバ。かならば身をもあさば。携へ持事なり。年久敷家ふ持傳へたるなどふも。人をたびく拷掠なしたるふよりて。打ふるとちろよ皮血等乾きはきて。いのふをつよく拷掠したるさまみやなり。それとも大とふ尊敬して。家ふ傳へ置事なモ。蝦夷國志

○食器の事

土人等を桦皮を剥て。丸小屋を補理し。或も是れ曲げ筐として飯をたき。又椀をも桦皮より作るなり。其簡

便實ふ奇といへし。石狩日誌

○土鍋の事

唐太北内。字イナヲカルウシと云處よ。柳北大木有り。其傍より往來の土人削花を建て。拜をあし行ふとなり。其謂也。昔此島より鍋のなうりし頃。タコイより住る婆々が。土を以て始て鍋を作り。東浦北土人へ其製を教へ。夫ようして南濱より西浦北土人ふを教へんと。鍋を背負此所迄越來りて。風と過て破りたりと。夫より意せ達せざるを患ひて。此處みて病ふ罹り。終よ死せしと云う。其跡を今神ふ祭り置き。此邊りの土人。往來の

時として削花を奉りて。數日の途中の食糧を絶さば。
越さんあと殘祈う誓ふとぞ。如此其土鍋を此嶋にて
用ひしもと。昔比赤本話しの様ふ思ひ居たうしづ。今
茲丁巳鎮臺堀君御廻浦の砌ふ。クシユンナイよて土
鍋一枚。土中よりほり出せしとて。同所比土人獻せ
し由みて持歸り給ひしを見侍り。余も始て土鍋を用
ひし昔語りを信じぬ。唐太日誌

○酒瓶の事
北蝦夷新圖說ふ。滿州より易へ来る酒瓶二品あり。其
狀一つハ萩を以て製したる籠なり。内面澁糊を以て

紙貼し。酒を盛る久しうして敗損せ愁を見ず。大小種
々ありといへども。大抵七八升より一斗二三升を納
る。一つも木を以て輪を製し。外面より澁糊紙貼して
是を製也。是も亦大小同じからずして。大抵一二升よ
り三四升ふとあると云。千鴿志料

○酒器の事

酒宴ふハ禮義甚厚し。仮初ふも麌略なる事をせば。漸
々と醉たる後も崩き易きやうなきども。是和むるの
禮なりと云へり。各諷ひ舞後ふも和ふ過ぐ。騒々しき
事あるなり。扱器物の多きを雅焉うとして。日本の

行器耳盤湯桶柄杓盃臺等類。都て金蒔繪の付たると
悦ぶなり。皆此酒宴の酒器有用ある道具なり。時ふ松
前の者云ふ。留川長右衛門と云通詞。松前所在嶋の内
ふ。ユタカといふ漁獵の稼場所の己名來て言ゆうる。
近年も器物ふ。何を珍らしき器物參らばとかくる。通
詞長右衛門是ふねづんて。何ぞ與へたく思ひ。因て松
前表へ其旨を云送りけり。彼場所請負の主人。彼是と
思ひ廻して。金めつきの金物付の狹箱を遣しけり。此
箱の内も金箔紙みて張たる故。内も外も金光りふ輝
たり。長右衛門此箱到來しなれば。急き其旨を彼の己

名ふ云遣して。さて乙名ユタカふ對面して曰。此ふび
松前表より良器物到來せり。因て呼ふゑんぜたりと
云。ユタカ其品を見て大ふ悦び。天地開けてより。如此
珍しき物もよむべらじと。思ひ勇み進て交易せり。此
代り物ふ干魚類品々の價を出し。其狹箱請取。得より
かしよしと。私宅ふ持歸りなり。私宅ふ於て。彼狹箱を
つくぐと見てれもふやう。唯今まで器物も多しとい
へども。誠ふ類なき器物なりとて大ふ悦び。珍寶と求
め得くる高慢の意生じ。此を弘めんと思ひ。俄濁酒を
造りて。近村近郷の乙名長夷等找招き請。彼器物弘め

の酒宴を始めたり。時小彼狹箱を持出して濁酒十分
ふ盛り。座敷の中央小閣たり。來客の乙名蝦夷ども。此
器物を見て肝ふ銘し。古今ふ比類なき珍器なりと甚
賞翫して譽そやしけり。酒宴も既ふ終ん頃ふ。彼狹箱
も明き々れバ。内を張くる金光紙皆ちげふなり。是と
見て一坐の長夷を始め。大勢大ふ興を覺し。氣の毒づ
り々れバ。莫大の代物と交易せし。如此紛迷物を以
て。我產物を奪取するねらんとて。憤て頓て運上小屋
ふ行き。通詞長右衛門小逢てユタカづ曰。彼珍器ハ全
く紛迷物なりん。濁酒を盛たば内悉くちげたり

と云。爰ふおひて長右衛門是と聞て大ふあまう。全く
以て紛迷物ふらば。彼器物も衣類に入る箱ふて。水
類を入れる箱みてそなき事。能々詫び々れバ。漸々不
肖せしとのや。代物莫大ふ出して交易せし珍器物の
思ひ入の違たるよう出て。只一途ふ欺のきたりと。お
うりゝもうたる片意地と。領解させこそ思ひや
らる。都て蝦夷の器物等。酒宴ふせみ用ひ。外ふ用
ふべきふ其品々なく。未ざ人道せ開けざれば。器財ハ
入る事なし。蝦夷草紙

○蝦夷笛の事

東部釧路ふて。麿皮ふて笛を作り吹ける。此地を
檣皮以て作り用ふ。是以檣皮爲角。吹作。吻々之聲。呼麿
鷹射之。志まゝ葉隆禮の遼志ふ。夜半令獵人吹角倣鹿
鳴。鹿既集而射之等ふ似たる奇と爲べし。天鹽日誌

○暇夷琴の事

ニワフカル。一名ビ井ヌ三線。上國の人。是を暇夷琴といふ。糸五筋なり。胴も箱もしてくるものなり。趺坐して魚尾せ方を上ふなし。肩ふよせかけて。夷人淨瑠璃歌等ふ合て。左右の爪を以てかきならば。調子といふ事むねし。かゝる夷人もおせづら音を樂しむ事

れば。實乎平天下のいちあるしき事。尤尊き事なり。前松記

○暇夷琴の事

北蝦夷國ツサンといふ處。四弦琴を彈むのあり。う
さぐふらくハ。韃靼國より渡りたるものとのいふ説
有り。其から甚みじりくして。二尺四五寸其いと四
筋ありて。また柱を甚く別なり。其彈ときの音聲と考
ふる。樂甚しき時。聲せ高下ありて。牛せほゆる
如し。其歌なふといふ文勺をな々述べ。ふといふも
なし。唯おもひくふりくうたふ事なり。その用
ふる時も。いつなるや戎問ふ。海甚荒くして潮逆ま

くが如く。岸など崩れのふるゝ折など。此琴を出して。男女とすなく彈事なり。思ふよ海潮をまつておさむる由縁りもあらずと。或書ふのせらきたるゆゑ。所々尋ねたまごを曾て見せす。有事いたしりなうと。ウラヤシベツセ通辭あるものかよりたり。實ふ四琴の品。韃靼國ふるる事も。聞傳へたまご。其唱歌いまざ定らば。後の人知る事らば。此處ふるるして。あるのみなる所と残つぎ給へりし。蝦夷見聞誌

○蝦夷器物の事

太刀エムシ太刀の事

小太刀エムシ小太刀の事

總て刀をエムシといふ

柄イムシニ

翫ワウテ

頭シヤバ

鐔シキ

锷セツハ

鋸ハマキ

鞘シリカ

接羽セツバホ

錐シンコ

下緒イトリ

太刀も。皆本朝の衛府の太刀鞘卷。或る山刀等の古物みて。凡身もなし。金具も古代の江州彦根柳川の製と見也。皆昔サ商人賣渡したる所のあるべし。當世の商人此金具を稀よ買取て。

蝦夷後藤と稱し。世間へ出で事あり。今エムシ
とて。新み作り蝦夷へ遣せ。松前及び秋田渟
代等の麿鐵鋳冶より作らせたる。錆きくひなう。蝦
夷其よぶき事も。詳みえきども。すべて夷比風
武器を重み重寶とし。是と不持者ハ一家の主
とねること不能ふより。求之といふ。兜の鉢腹
卷の破れたるを所持したるゆのめり。足を
アヨツベと云。至重寶也。

斧ムカリ

鉈ナタ

鎌ヨツヘ

斬テウナ

鋸ノコギリ
鑿イビヨ

割刀

針

鉤

煙管

鍔

鍋ニユ

盆タキ

和卓アツシキ

臺サラ

銅提イトニウ

匙筈

桶

夷人の鍔。もと木比枝を以て造る故手扱と云。

以上も。凡商人より賣渡す。日本製せものなり。

杓カツクミ

杓子カシユリ

箸シヤリカ

繩ハリツカ

徽索シツシ

蒲筵シユウチナ

管絃の類。各自作。ヤリシヤリ

蝦夷拾遺

松前志。エバヤツ、即箭勑なる。此器もとより北韃の產あり。其製薄板を合せ。四角ふ金具を設けたり。夷人比製。板を合せ其上を樺皮ふて包み。左右ふ紐を付て背上小負ひ。右手比トゞくを規矩とす。皆北韃の製ふ倣へり。夷人手袖韃等の具を用ふる事なし。同書

エモニボ即蝦夷刀也。是昔日日本足利せ亂ふ。後藤せ徒。松前ふ遁走來りて。所作太刀なり。其金具も即夷地山中せ金銀なり。故ふ其性正しく巧も亦妙なり。今僅クふ所存以て重器とす。本藩舊事記中云。渡黨者也。亦是等せ徒と共に。松前ふ來ると。あらの武士ふして。勇猛不敵の將士戦さしたるなり。尤蝦夷人の懸刀といふハ。甚上品の太刀なり。エモニボあり。同書ふ。バラヲツフも。夷人せ鎗なり。方俗或をタチといふ。夷鬪争ひる時をいふ。およそ。猛獸せ類を突くふる。必ず此物を用ふ。蓋しオツフとも。總してホコを云ひ。千島志料

西夷地余市邊シマヘン小云傳クモトハシナふ。昔物語カモツコトハシナふ。おの山奥ヤマオホ小鍛冶スミヤシナサ。音オノする故シテふ至シタり見るふ。神靈集シムラウニシタリテ。タンネツフエモシシを製シメ。近づきけシマツキバ神カミモ鶴トリとシタりて飛去ヒガタシタ。其所シマツキふ。太刀短刀タケをアマコ獲ハシメたり。今ふ所々シマツキの酋長シマツキノシマツシタ某モ家カナ。小秘藏シマツシタといふ。厚田乙名タチタニサカナといふ。其の語カナりき。

蝦夷土産

○唐太器械の事

鍊金ルネンを大抵シマツキ本邦シマツキより渡シマツキとシタろの物モノを用シマツキふといへども。奥地シマツキふ至シタてハ。山丹サンダン製シメの物モノを用シマツキふ。大小種シマツキ々シマツキ。といへども。大抵シマツキ其シマツキ狀シマツキ同じ。昔日本シマツキ又シマツキ中國シマツキ也シタ。

地夷シマツキ製シメする所シマツキ土鍋シマツキ。大き徑シマツキ六七寸シマツキにして。兩邊シマツキせ握シマツキ耳シマツキ。なべの内邊シマツキ設シマツキく。皮シマツキを以シマツキて製シメし。繩シマツキふのシマツキ用シマツキるものを。トナリといふ。其トナリを以シマツキて弦シマツキとなし。火シマツキの燒シマツキ切シマツキせんシマツキ。あと恐シマツキきて樺木皮シマツキを纏シマツキつり。

土鍋シマツキ製造シメのあとハ。林藏シマツキ詳シマツキ此シマツキ載シマツキるあとを得シマツキば。夷言シマツキもと土鍋シマツキを指シマツキしてトエシユシマツキと稱シマツキ。是シマツキを忌シマツキてカモイシユシマツキと云シマツキ。其事實シマツキ詳シマツキふせざれども。神鍋シマツキと譯シマツキ。

椀シマツキまゝ大抵シマツキ本邦シマツキより渡シマツキし。物モノを用シマツキふ。奥地シマツキふ至シタて夷製シマツキのもせらシマツキ。

船也。此嶋の専用とまるところの物にして。其形蝦夷嶋ふ異モ。繩を前ふいへるトナリを用ひ。杖も木を以て是を造り。その末鋸を以て是を巻き釘を出せ。履板まさそへ用ふなり。

鎗也。本邦山丹の物を雜用ひ。柄長さ凡六七尺。異形の物なし。

此地弓矢比類。其他日用諸雜器。皆蝦夷嶋にて用る物とふとねる事なし。北蝦夷圖說

○小兒を入れ置器械の事

天鹽字チノミといふ所乎。子供を木皮もて筐様の物

を作り。是ふ入置樹の枝ふ下げる有す。其由縁を聞くよ。風吹も搖て快く寐ると。如此して育つる時も。生長して丈夫ふ成と。太古蝦夷地も皆是なりしう。當時絶て。北蝦夷オロツコタライカ。ニクブン。スマレンクル。山鞆邊ふ。其風遺遠りと語うける。余辰年彼邊みて見しものと。大同小異のみあり。其風今千百里外ふも及ばずやと思ふ。番歸育兒。以大布爲襁褓。有事耕織。則繫布於樹。較枝桺相距遠近。首尾結之。若懸牀然。風動枝葉颯々然。兒酣睡其中。不顛不怖。飢則就乳。之醒。仍置焉。故長不畏風寒。終歲赤裸板緣高樹。若素習然。元次山思。

太古詩曰。嬰孩寄樹巔。就水捕鷦鷯。所歎同鳥獸。身意復

何拘。與此大相類。不可謂社番。非無懷葛天之民也。

采風社

圖暗合と謂べし。天鹽日誌

空知郡乙名セツカウスの家正宿せる時。我輩比頭上ふらぐり。赤子涕泣する。聲聞えぐり。而して其居る所審あらば。尚ほ耳を聳て聞所いよく頭上にして。坐席の邊ふらば。八方を見廻せども。赤子を置べきは場所。更ふ見えざれば。餘りふいぶうしくおもひ。同僚ふ問へども。是又我輩と同じく。其所在をしらむとあらず。不審ふおもふ折から。戸主セツカウス何事か

るや。イノコふ語るをみる。セツカウスの妻。速ふ爐の上ふ釣り置く處の棚

奥羽北海道ふ於て。俗ふ通稱する火棚なり。いづきも臺所の爐比上ふ釣りあるあり。農家或ハ漁家ふ於てハ。樞要の棚みて。日々働く所の濡ぐる衣類。股引その他一式比ぬき物を。焚火の上ふかけて。乾かすべき棚なり。

よ。釣り下げる。小さき美ある俵の如き物を取卸し。前よいふとあるの。キナと云敷布の等を織る草茂以て揃うへたる。赤子を入れ置く器物なり。

中より裸体の赤子ハ生きて。七八ヶ月ハから經り
と思しきを出し。乳を呑せられば。忽涕泣を止め。而して母の懷を離し遊び。居る折うち。我人愛を加へたるよ。更に屈する色なく。肥て色白く誠よ可愛の小兒あり。左もうれしげよ遊び。聊寒氣ウるべき躰も見えず。其健康なるトと驚くよ絶たり。土人の常よ壯健なる事。是を以て推て知るべし。尚同家ヨモ。十一歳ばかりを頭として。五六歳ヨ至る。三人のセカチアリ。近傍土人の家ヨモ使ひ。或ハ遊びよ歩行する等。雪中何生モ跣足なり。上川見聞奇談

オロツコ。小兒を入置く器械あり。名をチヤクカといふ。小兒を縛し置事。當歳より二歳の間なり。よくあるく時を以て。チヤクカをも離つ期となすと。小兒を此チヤクカふ結び付置きて。啼くときも其器のまゝ抱へて。乳を飲ませ。亦釣置くなり。此形林藏画く者と小異あり。チヤクカの製作也。北蝦夷圖說ヨミえたり。國觀録

○麻苧ハシマを仕懸弓ハシマ繩ハシマふ用る等の事
勇拂字クツチセの邊あり。畑ふも別て麻を作るなり。其麻苧ハシマを皆土人仕懸弓ハシマ繩ハシマふ用ふといづきの家ヨモ

ても。天井ふは仕懸弓を一面ふ積るべ。容易ふらぬ
數なり。一人サ獵夫ふて。一冬、ふ取獲る鹿。凡五六十頭
ふ下らざるよし語る。又同所字ハツタルセみて。星影
明りふ至るや。胡女樺明しを持て迎ふ來りしげ。我等
を見て。其明しを犬ふ含ませ置。先へ走り歸りしげ。須
臾の間。犬は其明りを含て。我等教導し程よく行しげ。
二三丁過て外の犬一足きたり。夫と齒合て。其明火を
消仕舞たるも可笑事なり。東蝦夷日誌

○海馬皮を繩代ふ用る事

海馬の皮を細く斷切りて。繩の代りふ用るふ。甚強く

して。年をふれども切る事なし。是戎夷言ふトナリ
といふ。北海隨筆

○器具ふ關る草木の事

松前志ふ。樺櫻あり。夷人此皮找藥品とも。山櫻とい。素
よう別物なり。亦邦俗のトチカバといふ。山櫻サ皮
なり。夷方是を鍋とする事あり。樺邦俗夷人共ふ。此木
サ皮を公用比ものとす。夷地諸山々きて多し。松節此
物共ふ燈ふ代つし。又武用サ一具とす。民用尤む不し。
夷人樺皮を名づけてタツと云。

蝦夷草木志料ふ。ノボリベ邊の方言ふタツ。或云。萬

葉集ふカニハ。三代實錄ふカバ。本草ふ檣木。小葉圓葉
め異。及其皮數重相分るも。あり。まゝ牢固なるもの
あり。夷人そぞ牢固なるを貴ス。是を屋ふ覆ひ。まゝ曲
て捲杯を造といふ。其相分るも。せ。但火炬の料とな
きのス。まゝ此樹より釀生せし耳を。アヘヲツカルと
いひて。引火の料となむといつう。

東夷物産誌ふ。トベニと云木。松前人イタヤと云。カヘ
デの族をいふなり。其樹密理ふして。白色甚不堅して
鏤め易し。夷人專以器物となむ。蝦夷草木志料ふ。享保
復言ふ。野鷄楓と書う。此樹廿種類。夷地ふもあとふお

ほし。其葉紫葛よ似たるもの有。俗ふオニモミヂとい
ふ。まゝ五尖七尖のもの有。木芙蓉よ似たるもの有。
東部ふてトキハモミヂといふ。冬月萎まで。大葉ふし
て十餘尖叶もの有。東都ふてイタヤヒ云。夷中廿刀把
及諸器物おほくる。此材ふて造ると云。其木ホドカシ
ハなどよも似たり。此材夷中廿鈍刀を損せ。沙流山
中其種類數多。イクバシ。マカリ。タシロ等。柄鞘及
杓子煙草入等の器類。皆此木ふて作る。

東夷物産誌ふ。タツブ即檣なり。樹皮用をねむ。あと多
し。常よ用て火を發し。又是找曲て桶ふつくる。板を底

とねして水を汲む。まゝ曲て杓となすものを。オカツ
クミといふ。又以て屋を覆ふ。其種類不一。多くハ小葉
のものなり。吾邦俗是ガオカビカバと云。ボリベツ
ム大葉サモのものなり。此真のカバの属なり。又圓葉のも
れにア。

松前志よ。シナ木字不詳。此木榎木也葉似ゝり。玉篇
よ榎木皮可爲索と疑ふらくも此木ならんり。津輕北
人ちまとマタといふ。皮を剥ぎて繩よ縫ひ。或も舟を
とぢる繩とも。此物甚水よつよく。釘ふ代用すべし。夷
人は屋を造り。荷物をからげ。舟をほくり。諸物を調ふ

るものも。皆悉く是を用。故。上方俗。サ馬具より。以下諸
は用具。ふ。亦此物を第一とす。此。亦の或も紙を製也
べしとも云う。いづれらむ。東遊記附錄。ふ級といふ
木多し。皮を剥て蝦夷人アツシ。ふ作る。此木。ム皮囊。ふ
して鼠食。モ。細く。ようて。至て。強し。といつり。盛衰記
よ。大佛殿造營の所。信濃國。よ多き。級の皮。むき。おほ
せて。奉ら。事有し。と覺。も。此地。此木。至て。多し。

オシコモミ蠻語なりと三才圖繪よ見えたう。
或人云。是他國よ所謂伽羅木と書うと。中家材と略なし。

て朽がしく。工匠好て家の土臺とも。木理あまやうにして葉比香る羅漢松ふ同じ。木理もとより堅硬ふして其色代赭比ごとし。華人比所謂淡古銅色こぼれなり。夷人是を弓材とも。まゝ他國ふ此樹を一位木とも云々。笏ふつくるべ故なりといふ。又袂比字をサク比木といへる説あり。字彙ふ袂音永。木可爲笏といへり。然きども貝原氏ケイホウシが大和木草の圖形ふ據て考ふべき。堂木松前のオシコと異なり。疑らくぞ別木なるべし。堂上方ふて祭ふ用るものも亦此木あり。前栽ふこぼれ植て佳觀可愛。山雀好てこの木比實を食ふ。赤くして

南天燭子比如し。夷方言オンコウラルマニといふ。鬱金嶽ケイセンケンタ今云の本名なり。此樹多しつきけり。

或云此木年久しく水みひたせる。伽羅となるといふ。また古弓を伽羅とまといふあとあれば。別ふ符合せる考あり。

一工人云此木もし深鍊色找出さしむるふも。帆立貝せ灰を以て煎るふ。甚妙なりヒ。

松前志ふ。コブノキ他國比ものと同じ。木性臭木ふ類する惡木なり。五六月赤實をむきぶ。鳥あきれ食ふ。臭木比實より小なり。方俗此木を薪と見る事と忌む。藩

士工藤長舊云。東部比夷人。此木を取て葬禮の式有用。まゝ此木を海中ふ入ること戎忌も。漁獵ふ害ありといふとぞ。

東夷物産誌。シユンニ即黃棟。彼地みて夷人皮を剥ぎ截て。輪とあし削うちうむめて文をなし。婦人は是を戴き。頭の飾とす。

蝦夷草木志料。ウムザキナ。ミツカドカヤ。一名ミツドスケ。菁茅
書經禹貢此三脊の茅也。彼國古へ酒を漉て。神よ供せるものは是也。夷中比種を長大みして。さく。ふ産さるものと異なり。夷人とりて席戎つくる。シナノ木

比皮をまじへて文飾とす。其名をアヤキナと云。此夷中薦席のけや々きものなり。又その小なると。チタルヘといふ。おきをねづて用ふといへり。又白老邊ふてムリ。茅比屬ふして堅韌光滑なり。夷人編て蓬となし。まゝ唐太の鳴夷。編て囊をつくる。其製極めて密緻。其文まゝ數等。此戎テニキといふ。千鳴志料

蝦夷風俗彙纂後編卷六 紋

